



- 02 あの豪雨を忘れない
平成 29 年 7 月九州北部豪雨から 3 年
- 08 同和問題を知っていますか？
- 11 夏の節電術
- 28 おにぎりレシピコンテスト

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、掲載している内容は変更・中止もありえますので、必ずご確認ください。

あの豪雨を

7.5 忘れない

～平成 29 年 7 月九州北部豪雨から 3 年～



平成 29 年 7 月九州北部豪雨

平成 29 年 7 月 5 日～6 日にかけて、朝倉市・東峰村などに大きな被害をもたらした豪雨災害。朝倉市では 129.5 mm の 1 時間雨量（5 日 15 時 38 分までの 1 時間）が観測（アメダス）されたほか、最大 24 時間降水量は 545.5 mm となり、朝倉観測所での観測開始（昭和 52 年 2 月）以来の 1 位を更新する大雨となった。

人的被害 計 35 人【死者 33 人（災害関連死 1 人を含む）、行方不明者 2 人】

避難者数 最大 1204 人 住家等建物被害 計 1471 件

平成 29 年 7 月 5 日、17 時 51 分、九州地方では初めて発令された大雨特別警報。
特に、黒川ではわずか 9 時間で 77.4 mm という、短時間に記録的豪雨を観測。これは、観測史上最大の記録であった 12 時間雨量 70.7 mm（気象庁観測／東京都（大島観測所）平成 25 年 10 月 16 日）を上回る雨量であり、朝倉市の 7 月平均月間雨量の 2 倍を超えるものでした。

観測史上最大の
大雨が朝倉を襲った

あの日を忘れない

平成 29 年 7 月 九州北部豪雨

山が崩れた……
土砂・流木がまちへ

今回の災害で大きな被害をもたらした主な要因は、洪水とともに押し寄せた大量の土砂・流木でした。発生した土砂は約 1000 万 m³（福岡 PayPayドーム約 6 杯分）、流木は約 17 万 t（25 m プール約 580 杯分）。降り続ける大雨が山肌をえぐり、大量の木々や土砂が河川へ流れ込みました。のどかな川は、表情を一変させ、激しい濁流が堤防を削り、家屋や田畑をも飲み込んだのです。

7 月 5 日は市民防災の日

市では、平成 29 年 7 月九州北部豪雨の教訓から、7 月 5 日を「市民防災の日」とし、出水期を迎える前などに防災シンポジウムや講演会の開催などを行っています。

「あの豪雨を忘れないため」「災害に備えるため」、私たち一人ひとりが、この日を防災について考える機会としましょう。

当日は、10 時に防災行政無線で全市一斉の黙とうを行います。



特集

～平成 29 年 7 月九州北部豪雨から 3 年～

風化させない

時間とともに薄れゆく記憶。2 人の当事者の話から「あの豪雨」をたどります。



⑧多数の浸水被害が出た蜷城地区。ボートでの救助救出が行われた



⑥中村地区(杷木松末)で救助活動中にタンク車(写真右奥)も濁流に飲み込まれた



⑦石詰地区(杷木松末)での捜索



⑨「三連水車の里あさくら」前の山田交差点に流れ込んだ大量の流木(↑)。災害現場へ向かう消防車両の通行を阻み、救助活動は困難なものとなった(→)



写真提供(⑤⑥⑦⑧⑨):甘木・朝倉消防本部



④流木が押し寄せた旧松末小学校の体育館



⑤積乱雲が発達した「かなとこ雲」/多々良川(福岡市)から撮影。雲の下が朝倉市の方角にあたる



①豪雨で大きな被害を受けた旧松末小学校 1 階の職員室



③旧松末小学校には瞬間に濁流が押し寄せた。校庭は車のボンネットの高さまで冠水した



②旧松末小学校で一夜を明かし、避難所に向かうバスを目指す児童たち

写真提供(①②③④):西日本新聞社



甘木・朝倉消防本部 元消防長
大楠 喜彦 さん

早期の自主避難、『互近所』意識 自助・共助の行動が命を守る

24 時間で 500 件を超える 119 番通報。筑後地域消防指令センターでは、通報への対応が困難となるなど、状況は刻々と悪化していきました。

現場では、道路の冠水や寸断、土砂・流木により、災害現場へ到着すること自体困難。濁流で胸まで水に浸かりながら、電柱にしがみついていた住民を救出するなど懸命に救助を続けましたが、救助活動は思うように進まない状況でした。そこで、福岡県消防相互応援協定による応援と消防庁へ緊急消防援助隊の応援を要請。県内 24 の消防本部、1 府 7 県の消防機関、延べ 1 万 2000 人を超える協力をいただきました。

豪雨災害以降、消防本部では、災害時の情報収集を見直し、被災状況を詳しく把握するため、現場出動隊からの映像や画像による報告を徹底しました。また、近隣消防本部との合同訓練を行い、協力体制を強固にする取り組みを加速させました。

一方で、災害発生時は住民の自助・共助が重要となります。地域コミュニティでは、

防災講演会や訓練などが実施され、防災意識と災害対応能力が向上していると感じています。今後はいつ、どこで起こるか分からない災害に対応するため、消防署や消防団を活用した訓練などを定期的にも実施することも必要でしょう。

さらに、いざというとき、避難指示などの発令後では避難が間に合わない場合が多く、住民一人ひとりが早期に自主的に避難しなければなりません。その際、避難が難しい高齢者などの「要配慮者」を近所の人助けあう『互近所』という意識が叫ばれています。これは、防災隣組を確立する点で、安否確認などに有効です。

あの災害を風化させてはいけません。復興はまだ道半ばです。多くの人々が 1 日も早く、安全で安心して暮らせるようになることを願います。

日常ではわからない災害の恐怖 何度でも伝え続ける命を守る「備え」

「まさか、朝倉で災害が起こるなんて」。『どこでも災害の危険性はある』この言葉を平成 29 年 7 月九州北部豪雨を経験して実感しました。

あの日、「赤谷川が一部氾濫した」と一報が入り、赤谷川近くの松末コミュニティ協議会事務所に到着した当初は、あんなひどい雨になるとは思っていませんでした。

時間とともに激しくなる雨。事務所前の道路には膝下まで濁流が流れこんでおり、子どもや大人約 50 人が近くの松末小学校体育館へ避難しました。しかし、濁流はさらに勢いを増し、危険を感じた私たちは校舎の 3 階へ上りました。

あの夜、覚えているのは、やまない雨、鳴り続ける雷。岩が「ゴツン、ゴツン」とぶつかり、裏山が崩れる音。濁流は校舎の 2 階まで迫っており、「死ぬかもしれない」と本気で思いました。「雨でも人は死ぬ」、助かったのは幸運だっただけで、いち早く逃げることの大切さを身をもって知りました。

私たちが普段と変わらない生活を送る中で、災害が自分の生活に直接リンクすることはないでしょう。自身が経験して初めて災害の怖さを知るはずです。

豪雨を経験した当事者である記者は自分だけだからこそ、風化させないためにも伝えなければいけない。何度でもしつこいと言われようが、自身の経験や防災に関する記事を書き続けなければならないと思っています。

『命を守る災害への備えを進めてほしい』。私の経験がどこまで伝わるかわかりませんが、一人でも多くの方が防災について考えるきっかけにつながることを願っています。朝倉の復興を切に願いながら一。



西日本新聞社 元朝倉支局長
中川 次郎 さん

当時、朝倉支局長として、平成 29 年 7 月九州北部豪雨取材し続けた。筑豊総局へ転勤した現在も、豪雨災害・防災について記事を掲載し、警鐘を鳴らしている。

これまでの歩み

平成30年
2月

地域支え合いセンター開設

被災者の生活状況の確認、支援情報の提供など、各種専門機関と連携・協力して生活再建を支援。

また、令和元年11月から、被災者の交流の場として、災害公営住宅での集いの場「えんがわ」を定期的に開催。

令和元年
8月～

災害公営住宅の完成・ 宅地分譲事業開始

- ・災害公営住宅(杷木団地 50戸、柿添団地 30戸)
- ・富有ヶ丘団地(2区画)
- ・久喜宮小学校グラウンド跡地(10区画、令和2年7月分譲開始予定)



令和2年
4月

4集落(中村・石詰・小河内・疋目)の 長期避難世帯が認定解除

長期避難世帯6地区91世帯のうち、4集落[中村、石詰、小河内(杷木松末地区)、疋目(高木地区)]の認定を解除。乙石(杷木松末地区)、黒松(高木地区)の集落は、避難経路に不安があるため、復旧を進め、解除に向けて検討。

現在 復旧から復興へ

朝倉市の現在

～写真で見る主な復旧状況～



1 県道塔ノ瀬十文字
小郡線復旧完了



2 治山(山腹工)完成



3 砂防堰堤完成



4 急傾斜地対策工完成



5 赤谷川河川復旧中



6 治山(山腹工)完成



7 梅ヶ谷ため池土砂撤去



8 農地復旧完了



9 桂川護岸復旧完了



1 道路崩壊(地下)



2 山腹崩壊(宮園)



3 土砂災害(石詰)



7 ため池土砂堆塞(梅ヶ谷)



6 山腹崩壊(若市)



8 農地土砂堆積(山田)



5 赤谷川洪水・流木・土砂災害(東林田)

復旧から復興へ

歩みと復興の灯



林 裕二 市長

「復興」を加速。「災害の記憶」を伝承。

平成29年7月5日の記録的な豪雨が、山林や田畑、そして住宅をも押し流し、私たちのふるさと「朝倉」を、土砂と流木が一面を覆う想像を絶する姿に変えてしまいました。

朝倉市では、33人の尊い命が奪われ、未だ2人の行方がわかりません。災害で犠牲になられた方々とそのご遺族に対しまして、心より哀悼の意を表します。

豪雨災害から3年がたとうとしています。家や働く場所を失い、将来の生活に不安を抱えながら、未だ避難生活を強いられている人たちがいます。そうした人たちが、早期に生活再建を果たすことができるよう、国や県と一丸となり、インフラの本復旧・被災者相談や支援に力を注ぐとともに、地域コミュニティや農林商工業の再生を支援し、復興への取り組みを一層加速させます。

さらに、この災害の記憶を風化させないため、「伝承広場」の整備を進め、「市民防災の日」の取り組みなどの中で、その経験と教訓を後世に伝えていきます。

経験と教訓を後世に
伝承広場を整備

土砂災害の経験と教訓を後世に継承し、市内外へ発信するため、伝承広場を整備します。

被災状況だけでなく、復旧事業についても伝えられるように、防災学習の拠点とします。



▲伝承広場イメージ

復興を実感できるように
「復興実施計画」の策定へ

現在は復興計画に基づき、「再生期」として一日も早い復旧を進め、被災前の活力を回復し、地域の価値を高める取り組みを進めています。

また、豪雨災害からの復興を実感できるように、被災地域が抱える課題を整理し、復興施策を具体化した「朝倉市復興実施計画」を今年度中に策定します。

復興の灯

—これからの歩み—